

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-770	A-139	16-025 滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
題名（原題／訳）		
<p>Ten-year alcohol consumption typologies and trajectories of C-reactive protein, interleukin-6 and interleukin-1 receptor antagonist over the following 12 years: a prospective cohort study.</p> <p>飲酒量の長期変化と炎症マーカーとの関連～12年前向きコホート研究～</p>		
執筆者		
Bell S, Mehta G, Moore K, Britton A.		
掲載誌		
J Intern Med. 2017 Jan;281(1):75-85. doi: 10.1111/joim.12544.		
キーワード		PMID
飲酒、サイトカイン、炎症、長期疫学研究		27485145
要 旨		
<p>目的： 飲酒量変化と炎症マーカーとの関連を、前向きコホート研究より明らかにすること。</p> <p>方法： British Whitehall II 研究に参加した 8,209 名（男性 69%、平均年齢[標準偏差] 50.0 [6.1]歳）を対象とした。約 10 年間の飲酒量変化を、①継続して非飲酒、②継続して中等度飲酒（基準群）、③継続して多量飲酒、④飲酒量変化あり、⑤禁酒の 5 群に分類し、C 反応性タンパク質（CRP）、インターロイキン-6（IL-6）、インターロイキン-1 受容体拮抗物質（IL-1 RA）との関連を解析した。炎症マーカーは 12 年間の追跡中最大 3 回まで測定した。性・年齢、人種、冠動脈疾患既往、2 型糖尿病既往、社会的地位、喫煙・運動習慣、食事および Body Mass Index で調整した混合線形回帰分析を実施。</p> <p>結果： 継続中等度飲酒群は期間を通して CRP が最も低値であったが、CRP 増加率は他の群と有意差がみられなかった。継続多量飲酒群や継続非飲酒群では IL-6 が期間を通して高値であったが、前者では特に IL-6 増加率が著明に高値であった。継続非飲酒群では IL-1 RA レベルも高値であった。これらの関連は多変量で調整後も有意であった。</p> <p>結論： 約 10 年間の飲酒量変化を用いた解析により、継続した中等度の飲酒で長期的に炎症マーカーの増加率が低く保たれる可能性が示された。</p>		